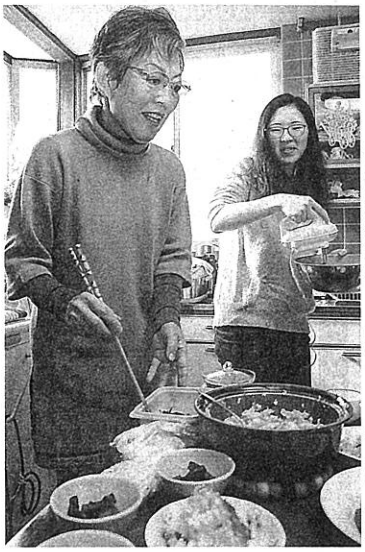
家族のカタチ③

西宮の楽野さんと神戸の石橋さん

異世代同居に挑戦

一つ屋根の下 近づく心の距離



同居中、一緒に食事の準備をする楽野初恵さん(左)と石橋佳寿美さん＝西宮市笠屋町(撮影・竜門和諒)

食卓には熱々のグラタンやサラダ。台所のテレビが、女優オードリー・ヘプバーンの笑顔を映し出す。

「こんなにきれいになるには、どうしたらいいんでしょうね」

「この人は元々きれいからねえ」

「ええ…」

「今のままで十分かわいいよ」

温かい空気が流れた。

武庫川女子大学4年生の石橋佳寿美さん(21)＝神戸市須磨区＝は昨年11月、西宮市笠屋町の楽野初恵さん(78)宅に1週間、住み込んだ。大学の先輩の研究を引き継ぎ、高齢者の自宅の空き部屋を若者に提供する「異世代シェア」を試行するため、一軒家の2階1室を借り、朝・夕食を共にした。

同市鳴尾東地区で多世代の共生を目指して活動するNPO法人「なごみ」の田村幸大事務局長(31)や地元の福祉関係者らが、石橋さんの研究をサポート。ボランティアに熱心で、夫の死後、1人で暮らす楽野さんが試みに応じてくれた。

異世代シェアはフランスなどから広がり、首都圏を中心に注目が高まっている。高齢者は安心感と収入を得られ、学生は家賃負担が減る。双方にメリットがあり、増え続ける空き家の活用につながると期待する声も出ている。

住み込んだことで、石橋さんの通学時間は1時間半から自転車で15分に短縮。さまざまな生活の知恵を教わり、近所の人とも知り合えた。一方、夜間の洗面所の音に気をもみ、朝は頑張って早く起きた。

冷え込む台所の床には、石橋さんの手でマットが敷かれた。「インターネットでの買い物を手伝ってもらったり、1人では作らない凝った料理も作ったり」と楽野さん。しかし、長期になると、家事の分担や玄関の鍵をどうするかなど、気掛かりもあるという。

わずか1週間の、一つ屋根の下での暮らし。それぞれの生活に戻った今は「気楽さより、ちょっと寂しい」。楽野さんはそう語る。

京都府では、一歩進んだ「次世代下宿」の試みが展開中だ。高齢者宅の空室を学生らに貸し、交流を図る「京都ソリデール」事業を府が進めており、神戸市出身の女子大学生(21)も「1人より安心」と利用する。

府はフランスや東京、福井で先進事例を調査。トイレの改修などに最大90万円を補助する制度も設け、昨年1月、京都市で最初の同居が始まった。ソリデールとはフランス語で「連帯」の意。家主には周辺より安い家賃を依頼し、多くは光熱費込みで2万～3万円台という。マッチングには時間をかけ、現在、6組が同居する。

「なごみ」の田村さんも今後、西宮市で同じ趣旨の取り組みを進めるつもりだ。家賃が高い首都圏と違い、ニーズは少ないかもしれないが「一緒に食事を作って食べたり、1日シェアをしたり、多世代をつなぐ形を探し続けたい」という。

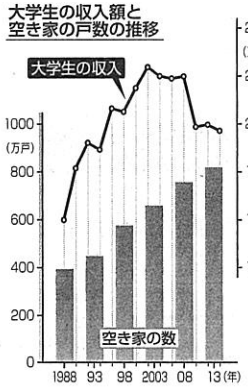
昨年末に開いた異世代シェアの報告会に参加した男性(72)は「そんなことまで…と思っていたが、病気をして、いろんな共生の形を考えた方がいいと思うようになった」と話す。

石橋さんは「料理の工夫など、親からも聞いたことのない話を教えてもらった。近くに来たら、顔が見たいな、寄ろうかな、と思う」と振り返る。年の差は57歳。大事なのは相手を思う気持ち。一緒に住むことで生まれる関係がある、と信じている。　(新開真理)

全住宅の13・5%が空き家に

メモ

総務省の調べでは、国内の空き家は増え続けて2013年には過去最高の820万戸に上り、全住宅に占める空き家の割合は13・5%となった。



一方、日本学生支援機構の調べによると、大学生の年間収入(仕送り、アルバイト、奨学金などの合計額)は近年、減少傾向にあり、奨学金の占める割合が増えている。